

2015年度（平成27年度）英語教育研究センター委託研究 実績報告書

小学校英語：指導技術向上の方法を探る

研究代表者：久埜 百合（中部学院大学学事顧問）

研究協力者：相田 眞喜子（田園調布雙葉小学校(非)・
フェリス女学院大学(非)）

1. 研究期間

2015年4月1日から2016年3月31日まで

2. 研究の目的

小学校教育における英語活動について、授業の実態を調査し、指導内容と指導方法を検討することによって、指導技術の問題点を探り、授業の向上を図るための方策を見つけることを目的とした。

2011~13年に行った小学生の英語学習に対する自己評価（Can-do“できる度 Check”）と実際の学習効果を照合する研究で、子どもたちがと日々の授業で何を学んでいると自覚し、指導に当たっている教師が子どもの学びをどう捉えているか調査したが、国公私立小学校の枠を超えて格差が生じていることが否定しがたい事実として浮かび上がった。しかも、調査した学校が3年にわたる調査で殆ど定位置にあり、格差が固定してしまっているのではないか、という危惧を持った。この結果を踏まえて、小学校英語授業の指導内容と指導技術を調査し、格差を解消し、小学校英語教育の改善を図るための方法を探ろう、ということを目的とした。

3. 研究の参加者

公立、私立、国立の小学校1校ずつ、合計3校より、各1名ずつ5年生の外国語（英語）の授業の担当者が参加した。個人の特定を防ぐため、今後、便宜的に3校をA校、B校、C校、3名をA, B, Cと呼ぶ。

授業者の資格： Bは小学校教諭である。A, B, Cともに中高の英語科免許を持っている。

開始期： A校は3年生から、B, C校は1年生から英語の授業を開始している。

授業頻度： AとBは週1回、Cは週2回行っている。

テキスト： AとCは同じ市販のテキスト*を使用して、そのカリキュラムで授業を行っている。

* 『English in Action』『WORD BOOK』（久埜百合著、ぼーぐなん）

Bは『Hi, friends!』を使用し、そのカリキュラムに準拠して授業を行っている。

4. 研究の方法

- ① 1学期末と2学期末にそれぞれ担当する5年生の授業を45分通して録画し、各自で指導者と子どもたちの発話を全て書き起こしてもらった。
- ② 3学期初めに英検 Jr. Gold 級を受験してもらった。
- ③ “できる度 Check”指導者向け事前アンケート（資料1）と記述式「振り返り」アンケート（資料2）に回答してもらった。

- ④ 各授業者と話し合う機会を設け、授業作りについて話し合った。
- ⑤ 各授業者の学校を1回ずつ訪問し、授業を直接参観させてもらった。
- ⑥ 全国の様々な学校を訪問し、外国語（英語）の授業担当者より直接聞き取りを行った。

5. 研究の結果

5.1. アンケート結果に見られる3名の授業者の授業観

3名の授業者には2013年度まで実施した“できる度 Check”で使用した「指導者向け事前アンケート」と同じアンケート（資料1）への記入と、今回新しく作成した記述式の「振り返り」（資料2）への記入を求めた。

(1) “できる度 Check” 「指導者向け事前アンケート」

“できる度 Check”で使用した「指導者向け事前アンケート」では、次の14項目の中から自分の授業に当てはまるもの全てに丸をつけ、更にその中でも最も大切にしているものを優先順に5つ選んでもらった。

①	できるだけ英語で授業をし、聞かせる英語は日本語で説明しない
②	子どもが推測しながら聞く力を付けられるよう、視聴覚教材を活用するなどして、まとまった英語を聞かせる
③	英語らしいイントネーションやリズム、発音を身に付けられるようにする
④	アイコンタクトを意識し、大きな声で言ったり、ジェスチャーを使ったりして表現するように指導する
⑤	子どもたちの発達段階に適した歌を選び、積極的に歌の指導を取り入れる
⑥	聞いたり話したりすることをなるべく文字で目にふれられるようにしておく
⑦	語彙をできるだけ増やす
⑧	授業では先ず「本時の英語表現」の英文を板書する
⑨	道案内など活動の場面を具体的に設定し、そこで使用する英語表現をあらかじめ決めて練習してから活動する
⑩	ペア・ワークやインタビュー等、子どもたち同士で行う活動を多く取り入れる
⑪	他教科で学習した題材も活動に取り入れる
⑫	年間指導計画を編成する際、英語の仕組みについて気づきを促すような指導順序を考慮する
⑬	1コマの授業の中で、英語の文法的なルールに気づきやすい内容と順序で指導する
⑭	母語による表現活動、読書指導などが英語活動に効果があると考え、母語の指導を重視する

その結果を次の表に示す。

	1位	2位	3位	4位	5位	
A	②	⑤	⑬	①	③	⑫
B	②	③	①	⑦	⑪	⑤, ⑫, ⑬
C	②	⑥	①	③	⑬	⑤, ⑦, ⑪, ⑫

- 最も大切として選んだ項目として全員が「②子どもが推測しながら聞く力を付けられるよう、視聴覚教材を活用するなどして、まとまった英語を聞かせる」という項目を選び、一致していた。

- 優先順位 5 番以内に①と③を全員が、⑬を 2 名が挙げた。
- 大切にしていることとして選ばれた項目も含めると、①、②、③、⑤、⑫、⑬を 3 名が一致して選び、⑦と⑩を 2 名が選んでいる。
- 唯一 1 名しか選ばなかった項目は「⑥聞いたり話したりすることをなるべく文字で目にふれられるようにしておく」である。

これらのことから、3 人の授業者のおかれている環境が大きく違うのにもかかわらず、それぞれの授業観には大きな違いがないと言える。一方、C のみが文字に関する項目である⑥を選び、しかも大切にしていることの 2 番目に掲げていることから、文字指導に関しては 3 名の指導に違いがあると思われる。

(2)記述式「振り返り」アンケート

記述式「振り返り」アンケート(資料 2) から次のようなことが読み取れる。

- A, B, C 共に、「聞く力」を育てることと、「伝える力」を育てることを大切にしていると回答した。
- A, B が「正しい文を使えること」に言及しているのに対して、C は「何とかして伝えようとする態度」という表現を用いていて、覚えさせて言わせることよりも、態度面をより重視していることが伺えた。C の勤務校が、英語教育を 1 年生から週 2 回で行って、より自然な習熟を目指すことができる環境から、教えたことを言わせようとする指導方法よりも、英語を使おうとする態度の育成に重きを置いている指導方法が特徴として見えてくる。
- A, B, C 共に、「英語らしい音」に慣れ親しませること、体験を通して気づくことを大切にしていることも分かった。
- 文字に関しては、時間数の条件の違いもあり、C のみが「読めること、書けること」をハッキリと目標に掲げている。但し、A 校でも C 校と同じテキストを使用しているため、子どもたちは自然に文字に触れる機会を得ている。A は「単語程度」を読めることを目指していると述べている。これは、A 校の英語教育開始期が 3 年生から、ということもあるが、指導者の指導目標に関する指導観にもよると考えられる。
- A, B, C 共に、「ことばを使い合うこと」を授業の中で実現しようとしていることも伺えた。子どもたちが興味関心を持つ話題を探し、子どもたちと意味のあるやり取りをしながら、英語の構造、音体系などに、子どもたちが気づいていくことを大きなねらいとして掲げている。

このように、3 名の授業観、指導観、言語観は大きな差がないことが分かった。

今回の研究に参加して、3 名ともに、DVD で記録された授業の文字化は時間のかかる大変な作業だが、そこから得るものが多かったと述べている。また、自分の使っている英語について客観的に詳細に記述することで、授業を細部まで見直すことができ、授業作りについて考え直すきっかけとなった、とも述べて、研究に参加できたことを喜んでいる。

第 1 回の授業の録画・書き起こしの後、各授業者と話し合いの時間をもち、授業について修正点などを考え続けながら第 2 回の授業を 2 学期末に録画してもらった。その時点で、特に B の授業での子どもたちへの語りかけには明らかな変化がみられた。即ち、ことばを使い合う体験の中から子どもたち自身が英語のルールを発見していくことを大切にしたいと思いつつも、第 1 回の時点では、様々な事情から、「正しい文」を教えて、覚えさせて、言わせなければならないという心理が働いていて、語りかける口調が「お手本調」になり、自然な英語ではなくなっていた。しかし、話し合いの後で行われた第 2 回の授業では、語りかける口調がより柔らかくなり、子どもたちに「正しい言い方を教える」のではなく、子どもたちとおしゃべりを楽しみながら「正しい言い方に触れさせる」という意図の変化が感じられ、授業者が指示を出す時の体の動かし方も、軽快に誘いかける気持ちを伝えていた。

5.2. 授業の構成と使用された語数・語の種類について

3名の指導者に1学期末と2学期末の2回にわたって授業をビデオで録画してもらった。その画像より得た情報を元に3名の授業構成について次に述べる。

	第1回			第2回		
	A	B	C	A	B	C
主にやり取り	01:21	24:38	08:50	22:41	20:02	00:00
一部やり取り	18:20	00:00	17:34	02:19	00:00	40:59
やり取り含む活動 合計	19:41	24:38	26:24	25:00	20:02	40:59
主にリピート	04:35	00:00	07:44	12:21	00:00	14:37
歌	01:00	02:54	06:00	00:56	04:55	07:50

数字は活動が行われた時間(分)

3名の授業者の授業の中で子どもたちとのやり取りを含む活動は1回目、2回目とも45分授業のうちおよそ20分前後であるのに対してCのみ2回目は40分以上、45分授業全体で常に子どもたちとやり取りをしながら進めていたことが分かる。

次に授業中に使用された語数を比較してみる。表中の「使用された総語数(のべ)」とは英語による発話全ての語数の合計を表し、「使用された単語の種類」とは同じ語は1種類と数えた種類数を表す。

	第1回			第2回		
	A	B	C	A	B	C
	指導者			指導者		
使用された総単語数(のべ)	1713	1319	1827	2266	1254	2514
使用された単語の種類	155	209	319	368	145	363
	児童			児童		
使用された総単語数(のべ)	611	312	449	323	227	1149
使用された単語の種類	63	79	132	120	71	184

45分の中で使用された総単語数・単語の種類数を見ると、AとCがどちらかというとき多傾向があるが、Bの場合、2回の授業、いずれにおいても良質のインプットを確保するために『えいごリアン』という視聴覚教材が活用されている。第1回では2002年度放映『えいごリアン』「Where is the supermarket?」、第2回では2000年度放映『えいごリアン』「Where is my cap?」を15分間視聴していて、子どもたちはその間も英語を聞き続けている。従って、Bの授業におけるインプットが少ないと結論づけることはできない。むしろ、『えいごリアン』の様な視聴覚教材を活用することで、指導者のインプットを補ってあまりあるインプットがあったと考えて良い。

児童が授業中に使用した英語の語数に目を向けると、Cのクラスの子どもたちの英語による発話が比較的多いことが分かる。1回目の授業ではAのクラスの子どもたちの発話が一番多いが、一方で使用された語彙が最も少ない。子どもたちの発話が多いが、内容的には同じことばを繰り返していた、ということになる。一方、Cのクラスでは子どもたちに様々な語を使った英語による発話を引き出していたことが分かる。子どもたちの学習歴からして、使用する語彙範疇が広がりを見せていることは、当然である。むしろ同一指導者でありながら、1回目より2回目の方が指導者のインプットも子どもたちのアウトプットも増えている点に注目したい。第1回目のターゲット文がThese are / Those areであったため、扱った題材が教室内のものに限られ、話題に広がりがなかったと考えることもできる。それに対して2回目の授業ではテキストを中心に授業が進み、テキストの中の様々な場面設定の中での会話を扱ったため、使用する語彙にも広がりが出たと考えられる。また、子どもが考えてきたクイズを出し、答えを考えるという活動が含まれて、子どもの選んだ語彙が増えたため、ここでも使用語彙の種類も総数も増えたのではないかと考えられる。

Aが2回目に扱った題材がCの2回目の授業と同じであった点も興味深い。Aの2回目とCの1回目を比較すると、どちらもやり取りを含む活動にかけた時間は25～26分で同じ様な構成になっている。しかしながら、得られた結果は同じではなかった。

Aは一生懸命英語で子どもたちに働きかけていて、総語数が多くなっているが、結果的には子どもたちの発した総単語数はCの授業の方が多くなっている。これは、Aの授業ではやり取りの部分で子どもたちが指導者の働きかけに日本語で答える場面が多かったからであると考えられる。

一方、Cの場合も、子どもたちの発話した語数は少し多いとはいえ、その内情は子どもたちが単語のみで答えることに留まってしまっていた。いずれの指導者にも子どもの文での発話を促す積極的な働きかけがあまり見られなかった。

これらのことを踏まえて、子どもたちがどうしたら英語で発話しようとしたのか、話題の選定や活動の設計を見直すことが授業改善につながると考える。子どもたちがインプットを自分の中に取り込み、自分も言いたいと思うことで発話につながるようにするには、インプットの工夫と、自分も言いたいと思うような意欲や意識を引き出す工夫が必要になる。インプットからインテイク、そしてアウトプットへという一連の流れの中で子どもの英語の仕組みへの気づきが促されると考えると、指導者による「効果的な語りかけ」と「子どもから発話を引き出す技術」を更に研究することが必要であると言える。

5.3. 英検 Jr. Gold 級の結果の考察

3校の成績を比較してみると、確かに授業時数、開始学年などの差が反映していると言えるかもしれない。3人の授業者の指導観、言語観に大きな差がないのに、1校が全国平均を大きく下回ったことを認めなければならない。これは指導内容や指導技術に起因するというより、その学校のおかれている事情によるところが大きいのではないだろうか。この格差が生ずる原因を考察し、そこで学んでいる子どもたちの学習環境を整え、改善する可能性を探りたい。

	平均正答率				
	語句	会話	文章	文字	全体
A校	74.7	71.2	75.4	76.3	74.6
B校	53.7	51.2	52.7	51.8	52.5
C校	82.3	80.5	82.1	88.3	83.1
学校版全国平均	67.9	65.9	67.7	71.6	68.2

(1) 3人の指導者の授業における文字の扱いの比較

45分の授業の始め方を比較すると、AとBはほぼ10分以内でウォーム・アップを終了して、授業本体に入る。一方、Cは17分くらいをウォーム・アップに充てていて、ウォーム・アップ中もテキストを使って指導をしている。Cはその後も、テキストに従った指導をつづけている。文字を見せている時間は、Aは長くても10分程度である。Bはアルファベット文字A-Z掲示、氏名・地名など固有名詞をローマ字で示す程度で、ほとんど見せていない、Cはウォーム・アップの時点からテキストや歌詞を使用していて、子どもたちが文字を見ている時間は、最も長い。Cの授業中、子どもたちはテキストのイラストを見ているが、それに添えてある英文を見ており、口頭表現活動をするとき、結果的に読み聞かせをしてもらっていることになる。文字を見慣れていて、子どもたちは自分が言える英語を、読んでいるような気持になっている。英検の問題文には、全員が初めて出合っている筈であるが、初めから読めるだろうという気分で、文字に向かっているA校、C校と、英文を見慣れていないB校とでは、子どもたちの文字に接する感覚が異なる。アルファベット文字のリストや日常的に目に

するアルファベットの単語に対しては、5年生であれば相当に見慣れている筈であるが、問題文の英文には、読もうとする前に、「おお、初めて」と思ってしまうだろう。自分が英語の音声で聞いたことがある筈、というところまで思いが届かないのではないか。この条件が、英検 Gold 級の結果に影響を与えていることは疑いの余地がない。

(2) 指導者の置かれている環境

一般的に考えられそうな理由として、中高英語科教員免許を取得している教員と、小学校教員免許のみ取得している学級担任が教えている場合を挙げられるかもしれないが、今回の調査では、3者とも英語の教員免許を取得しており、特に今問題にしている Gold 級の成績が低かった学校の指導者は、中学で英語を教えていた経験もあり、勤務校の地域の教員研修を企画し講師を務め、カリキュラムを作成したりする傍ら、学会で発表するなどの指導歴があるベテラン教師である。従って、今回 Gold 級の結果に差が出たことは、教員の指導力だけでは説明できない。

この1年間、いろいろな環境におかれている学校を尋ね、授業参観の機会を得て、教員や研修を行っている指導的な立場にある方々と直接話し合った中で、格差の原因になるのではないかと考えさせられた点を纏めてみた。

1. 自治体内の複数の小学校が足並みを揃えようとして、指導観がある程度固定されるので、教師個人の指導観だけでは授業ができず、個人の指導力を発揮できない
2. 担当学年の複数学級が同じ指導案で授業をすることになるので、数名の学級担任の指導力を勘案し、どの学級担任も同じように指導できる程度の指導案を作る必要がある。
3. 教材も固定され、市販のものを自由に使うことができない。教具を共有し、同じような授業デザインで授業を進めることになる。
4. 自治体が採用する支援員とのTTをすることが条件になっている場合、派遣されてくる支援員、またはALTなどの指導力に問題がある場合も否定できない。支援員やALTの指導力は均一でなく、また契約期間も短いので、系統だった指導の調整がやり難い。
5. T1を学級担任としても、T2は複数の学級を指導するので、クラス独自の指導よりは、同じことをすることが優先される。また、支援員・ALTは複数校を担当する例も多く、勢いその複数の学校が同じことをするようにもなる。
6. 指導計画が、学年ごとに固定しているので、担当学年の指導内容以外のことができない。
7. 年度ごとに担当学年が変わることが多く、1年～6年全てを経験していない学級担任も多いので、子どもたちの6年間にわたる英語習得の様子を観察する機会が乏しく、系統的な年間指導計画の理解が不足しがちである。
8. 担当学年に複数学級がある場合、他のクラスと歩調を合わせるという制約がある。年度末3月までに、各クラスが同じ内容で同じ指導方法で英語活動をする必要がある
9. 年度ごとにクラス替えがあり、また担任教師も担当学年が変わることが多く、従って、次の学級担任に引き継ぐために、各クラスの指導内容も揃えておく必要があり、異学年の指導内容に触れたり、授業中に子どもの状況を見て活動内容を変更したりすることはほとんど不可能である。
10. 教員の移動があり、継続指導ができない、また、転勤になれば新しい勤務校の指導の考え方に添わなければならないので、継続して自分の考えで指導することはできない。

誤解されがちな点であるが、国立・私立の方が優秀な子どもが集まる、とは限らない。上記のように、公立小学校のおかれた状況のために、国立・私立小学校に比べて上記のような規制があるので不利な状況が改善され難く、これが格差を固定化していると考えられる。

公立小学校で英語教育を進めるためには、多くの越えなければならない問題があり、しかも解決が急がれる。

子どもたちの学習能力差ではないところで、習熟に格差が生じていることを、これからも研究の大事な課題として、継続して考えていきたい。

6. 結論

今回、3人の授業それぞれ2回の記録を分析し、また実際に授業を参観させていただいて、授業改善の方法を探り、学校間格差を是正するために何が必要かを考えることができた。格差が生じやすい問題の根は深く、簡単ではないが、さまざまな教育環境におかれた子どもたちが、等しくより良い英語との出会いを享受できるようにしたいものである。そのために数点を列挙したい。

1. 指導者の指導技術を向上させるように、現場研修を充実させ、指導するものの英語研修も加える。
2. 指導力だけでは授業効果を上げきれない問題点について5. で述べたが、その問題点を少しでも解消するための方策を考えたい。
3. 授業中に文字に触れる機会を多くすることが学習をサポートすると思われる。これは読ませようと文字を追わせることでもなく、ましてや書かせることでもない。授業中に聞き続け、口頭で使い合っている英語表現が表現内容を伝える文字がイラストに添えて文字化されてあって、常に目に触れることができるように用意されていると、子どもたちの文字認識を自然に高める効果があることが授業の様子から見て取れる。
4. 視聴覚教材を効果的に使用することが、指導者をサポートし、授業を活性化させることも見て取れる。そのためには、視聴覚教材を精選する選択眼も養いたい。
5. これから作成される検定教科書など、テキスト類が増えてくると考えられるが、子どもたちの外国語学習能力に合わせて指導計画を立て、適切な指導順序に従って編集されることを望む。

Gold級の結果を手渡され、付記されたコメントを読んだ子どもたちは、次にGold級を受験するときはもっと頑張りたい、それまでには、こんな風に勉強していきたい、と書き綴っている。この子どもたちの高いモチベーションを大切にしたい。そして、子どもの他教科の学びの様子を熟知し、英語活動に参加する姿も常に観察することのできる学級担任がその強みを生かして、自信を持って授業に望めるようにしたい。今回の授業研究の中から問題点が見えてきたので、それを踏まえて、習熟度の格差を少しでも是正する方法を考え続けたい。

資料1：“できる度 Check”指導者向け事前アンケート

- 記入日：2016年 月 日
- 学校名：_____ ●記入者名：_____（お一人一枚ずつご記入下さい）
- 該当するものに○をつけて下さい：担任・JTE・専科教員・専科非常勤講師・
その他（ ）

◎ 次の①～⑭の中で、ご自身の授業に当てはまること全てに○△をつけてください。

①	できるだけ英語で授業をし、聞かせる英語は日本語で説明しない
②	子どもが推測しながら聞く力を付けられるよう、視聴覚教材を活用するなどして、まとまった英語を聞かせる
③	英語らしいイントネーションやリズム、発音を身に付けられるようにする
④	アイコンタクトを意識し、大きな声で言ったり、ジェスチャーを使ったりして表現するように指導する
⑤	子どもたちの発達段階に適した歌を選び、積極的に歌の指導を取り入れる
⑥	聞いたり話したりすることをなるべく文字で目にふれられるようにしておく
⑦	語彙をできるだけ増やす
⑧	授業では先ず「本時の英語表現」の英文を板書する
⑨	道案内など活動の場面を具体的に設定し、そこで使用する英語表現をあらかじめ決めて練習してから活動する
⑩	ペア・ワークやインタビュー等、子どもたち同士で行う活動を多く取り入れる
⑪	他教科で学習した題材も活動に取り入れる
⑫	年間指導計画を編成する際、英語の仕組みについて気づきを促すような指導順序を考慮する
⑬	1コマの授業の中で、英語の文法的なルールに気づきやすい内容と順序で指導する
⑭	母語による表現活動、読書指導などが英語活動に効果があると考え、母語の指導を重視する

★上記①～⑭の中で、最も大切にしていることを優先順に5つ選び、番号を書いてください。

1	2	3	4	5
---	---	---	---	---

◎ 評価の方法について、当てはまるものに○をつけて下さい。（複数回答可）

<input type="checkbox"/>	平常の授業中に子どもを観察し、「観点別評価」を基に評価をする
<input type="checkbox"/>	学期末などにテストを行い、評価の参考にする
<input type="checkbox"/>	評価は子どもには伝えない
<input type="checkbox"/>	評価を文章で伝える
<input type="checkbox"/>	◎○△の3段階で評価を伝える

◎ 本アンケートについて何かコメントがありましたら、ご自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました

資料2：記述式「振り返り」アンケート

2015年度 授業研究へのご参加・ご協力、誠にありがとうございました。
最後に普通の授業で先生方が大切にされていることなどについて伺わせて下さい。字数はご自由に！
どうぞよろしくお願い致します。 お名前：

1. 子どもたちが卒業する時点までに到達してほしい英語力をどのように思い描いていらっしゃいますか。
2. 影響を受けたと思われる主な指導方法について教えてください。
3. 英語運用能力の中で重視して指導されているのはどのような点でしょうか。
4. 45分授業の指導案を作る時に欠かせない指導項目を挙げて下さい。
5. 指導者として、現時点で身につけたいと願っておられる指導力があれば教えてください。
6. 今回の授業研究を通してお感じになられたことをお聴かせ下さい。